

D-TIMES

[dementia times] 2023/8

No.21

認知症ケア委員会



【手記】

認知症ケア委員会の榎元桂子です。

今回のD-TIMESは私の認知症の母の事を書いた手記を紹介します。介護・看護は認知症の方に関わる仕事なので、この手記を通じて自分の昔の思い出を含めて認知症症状がある利用者様に接する大切さをお伝えできればと思います。

後半では母のケアをして下さる職員の方のご紹介もします☆

「ねえ、私…ご飯食べたかしら。」

小学生の頃、ふすまをたたいてから母に聞いている祖母の声。

ある日は、台所で立っておひつ（炊いたご飯を入れるもの）を抱えて食べている祖母を目撃して驚いたり。

母は、父の両親の世話を焼き大変そうだったが認知症とはわからなかった。

今、認知症の利用者様の介護をする立場になり、認知症の特徴を理解できる仕事だと思いつくづく思う。

戦争を経験して、妹と二人で箱根に疎開した母は箱根方面に連れて行くと鮮明にその頃の幼い自分の記憶がよみがえり、同じ内容を必ず私たちに話します。

「もう何度も聞いてるよ」と、さえぎっても話は尽きない。

コロナの影響でか、外出の機会がだんだんと無くなり、定期的に行っていた町医者にも行かず、血圧の薬も飲んだかを忘れてしまい、二度飲んだ日にたまたま父の墓参りに誘っていた。

歩こうとしてもふらつき、階段を昇る事もままならず、介助をするように済ませて父が心配して「こんな母だよ」と知らせてくれている様な気がした。

その人らしい性格のまま少しずつ進んでいく母は、転倒を境に大腿骨転子部骨折のオペを済ませ、リハビリのチャンスをいただき、歩行も出来るようになりました。ただ転んだことを忘れていたため家へ帰ってまたどうにか一人暮らしをしたいとダダをこねる日もあるようだが先日の面会時には「この人にとってもお世話になっているのよ」「やっぱり家にいるのは無理よね」と、随分と自分の現状を理解している様子で安心した。ずっと拒否していた色塗りも何十年も習っていたパステル画の経験を活かしてとても素敵な色使いで塗り絵をした作品を見せてくれた。

大切なご家族の思いがある利用者様ひとりひとりの気持ちに寄り添ってその方らしく生きていただく。

健康や心理面にも配慮して認知症の介護・看護を皆で協力してやっていく。

この牧野ケアセンターの良さを皆さんにも知っていただきたいと思い乍ら、仕事を続けております。

ケアに関わる職員の皆さんに一言頂きました



いつも笑顔で過ごされていますね。帰りたいと思うこともありますがゆっくり過ごしてください。

【介護職員 木村さん】

「私はここに居ていいんでしょうか。娘ね、この下で働いているの？私ここで寝ているのかしら？」などとても不安そうな表情をしながら毎日質問されます。ここへは娘様と一緒に来た事、リハビリをしている事、ここに泊まって良い事、ご飯を食べて行ってくださいねとお伝えすると一日に何度も同じ質問をされますが傾聴し丁寧に接することを心掛け、安心して過ごせるよう支援しています。【看護職員 安齋主任】



「自分はここにまだ来たばかりで誰と来たのかしら」と質問があったり、「三春台に住んでいたのですちに帰りたい」とお話があったりします。一人で歩けるようにならないと伝えると、「もう一人で歩いているから大丈夫」という答えが返ってくるのでお話を聞いています。

【介護職員 大橋さん】（顔写真 NG）



左は母の塗り絵作品です♪

